

2017/05/21 「長良川下流域環境観察会」報告

真夏のような快晴の5月21日、千藤克彦さん（元長良川下流域生物相調査団）を講師に、河口堰のある長良川と、河口堰のない揖斐川と木曾川を比較しながら、午前は陸上から、午後は船に乗って下流域の自然の変化を観察しました。その後、赤須賀漁港でシジミプロジェクトの伊藤さんから最近の様子を伺いました。参加者は15名。この観察会は途中天候のための中止を含めて6回目。2010年に愛知県で行われた生物多様性条約 COP10 を機にはじまった、北海道から沖縄まで多くの市民団体が参加している「湿地のグリーンウェイブ」参加行事でもあります。

■ 木曾川右岸・木曾川三川公園（河口から約14km）

ここはかなり大きなワンド(湾処)になっています。川と繋がっていますが、木々や堆積した砂地などで囲まれ池のようになり、魚類などの水生生物の大切な棲み家になっています。オオヨシキリの「ギギヨシ!ギギヨシ!」というにぎやかな鳴き声も聞かれます。長良川では今は見られなくなったサンカクイ、マコモなど多様な植物が見られ、豊かな美しい風景が広がっています。今回は午前10時頃がちょうど干潮時のため、干潟に入りすぐに何種類もの魚や貝を採取できました。



■ 揖斐川・長良川（河口から約9.5km）

三川公園から河口堰へは長良川と揖斐川の真ん中を通る堤防道路になっています。千本松原が切れるあたりでは新たな浚渫工事が始まっていました。河口から9.5キロ地点の長良川と揖斐川で、それぞれ5分間、参加者全員でカニを採集しました。揖斐川はヨシ原が広がり、足下は柔かい湿地で、大小多くのカニ（アカテガニ、ベンケイガニ）を採取。長良川は道路から水辺まで乾いた草地になり、大きな樹木や帰化植物が増えています。水際にもヨシはほとんど見られず、揖斐川との違いは明らかです。採れたカニは大きいものだけでした。千藤先生のお話では、長良川で採取したカニは揖斐川から移動したものではないかとのこと。カニは6月頃に水辺で産卵し、その幼生が引き潮に乗って海域に達し、そこで成長し、上げ潮にのって河川感潮域に着底するため、潮の流れが堰で遮断されている長良川では生育できません。



■ 長良川河口堰周辺

午後は船に乗って川側から観察しました。河口堰を越えるために閘門（こうもん）を通り、河口から約6～7キロ地点のヨシ原を見ました。かつてはこの辺りには下流域最大のヨシ原が広がっていました。今では9割以上が消失しています。わずかに残ったヨシは昨年よりさらに減り、点々と残っているだけで、数えられるほど。生き物の大切な生息地、水質浄化の役割を果たしていたヨシ原はほとんど姿を消そうとしています。その後、左岸7キロ地点の長良導水取水口（知多半島地域の水道水取水口）を見ました。「なぜ一番下流の水質が悪い水をわざわざ飲料水にするんだろう？」誰もが抱く疑問です。



その後再び閘門を通過し（堰上流と下流の水位調節や塩分除去作業のためかなり時間がかかります）堰の下流、河口から4キロ地点（河口堰は5.4キロ）の長良川と揖斐川で川底の土砂を採取しました。水温はどちらも22℃。長良川は、真っ黒なヘドロで、酸化還元電位は-235mV。貝など何も見つかりませんでした。マイナスでは酸素を必要とする生物は生きられません。揖斐川は、砂で酸化還元電位は+178mV。中に小指の先ほどの小さいシジミが1個見つかりました。「揖斐川も長良川も上から見るだけだと同じように見えるけれど、川底がこんなに違っていることに驚いた！」初めて参加した人の感想です。



■ 赤須賀は今・地元の声

その後、赤須賀漁港近くで、「しじみプロジェクト・桑名」の伊藤研司さんから最近の様子を伺いました。伊藤さんたちは河口堰建設が始まった頃から今まで20年以上、漁師さんの協力を得て、しじみ調査を続けてこられました。

「赤須賀のシジミ漁にとって長良川の河口部は最も大切な漁場でした。しかしシジミ調査を始めた頃には、すでに河口堰建設のために川底の浚渫が始まっていて、それ以前に比べて川底は相当悪い状態になっていたように思います。しかしそれでも2、3年はなんとか採れていました。上流域のマウンドあたり（堰の完成後に浚渫されてなくなった）までは良い漁場だったからです。しかし堰のゲートが閉まり、長良川ではほとんど採れなくなりなりました。木曾川でも減り、ここ数年は最後に残った揖斐川でもさらに減少。商品価値があまりない小さい貝しか採れなくなっています。原因はよくわからないけれど、徳山ダムの完成で上流から有機物の供給が減ってしまったためではないか、護岸工事の影響ではないか、などと言われています。漁協は資源保護のためにシジミ漁、ハマグリ漁共に厳しいルールを作って操業してきました。現在ハマグリ漁では週3回、1日2時間操業、1人（1隻）あたり25kgの漁獲制限をしています。さらに減らさなければならぬかもしれないようです。収入はかつての3分の1ほど。漁船は100隻ほどありますが、シジミ漁を続けているのは7～8隻。せっかく就業した若い漁師の中には陸に上がる人が増えています。ハマグ

リについては長島沖、城南沖の人工干潟に漁協が稚貝を放流して、絶滅の危機にあったハマグリ復活の努力をしていますが、県外からの密猟にも悩まされています。漁業の不振は地元の経済にも影響を及ぼしているようです。漁師たちは誰もが、堰を上げて元のようにしてほしいと願っていると思います。」

■ 堰が閉鎖されて22年。堰の建設が赤須賀のヤマトシジミ漁へ大きな影響を及ぼすことは当初から言われていました。漁協はハマグリの子苗生産、人工干潟への放流などに取り組み、若い漁師さんも増えてきたという明るい話も聞いていただけに、木曾川や揖斐川でのシジミ漁の不振の話を聞き、河口堰の影響の甚大なことを改めて知りました。このままでは、私たちは赤須賀産のヤマトシジミが食べられなくなります。心配です。漁業は自然や生態系が維持されてこそ成り立つものです。環境悪化の原因を一つずつ取り除いていくことが、漁師さんの生活を守り、地域を再生し、私たち消費者も恩恵を受けることになります。一日も早い河口堰の開門がその一歩になるはずです。

伊藤研司さんの HP ito-kenji.net/nagaragawa.html 今までの調査の様子や動画が見られます。
赤須賀漁協の HP <http://www.akasuka-g.jp/index.html> 漁の様子などが見られます。

(報告 田中万寿)

